慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	系圖綱要, 太田亮著
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.4 (1923. 11) ,p.130(594)- 131(595)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19231100-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を比較すれば、希臘羅馬の家族を組織して居た原始的宗教は、又婚姻制度並びに父權を確立し、親族關係を定め、而して財產權及び相續權をも規定したることが解るのである。此の同じ宗教は漸次家族を擴大したる後、更に一つの大なる社會卽ち都市を形成し而して家族を支配したと同樣にその都市をも支配した。故に古代人の凡ての私法も、凡ての制度も皆宗教より由來したのであつた。都市は全然宗教を基とせる主義、規則、習慣、統治を奉じた。然し乍ら、時を經るに從つて此の古代宗教は、或は變化し、或は消滅したが、それと共に私法及び政權も變化した。斯くて後世革命の相亞いで到るや、社會的變革は步調を同じくして、知識の開發に伴ふやうになつたのである。』かゝる見地の下に、まづ原始宗教の靈魂觀と死生觀とを檢して、死者崇拜と聖火崇拜とが家族宗教の根本要素なることを明かにし、ついでその宗教を基とせる家族と都市との組織及びその發展を叙じ、その都市においては第一次革命によつて政教二權が國王を去つて貴族階級にうつり、第二次革命によつて、從來强國に組織結合され、强大なる權力を有した古代の宗教的家族がその努力を喪失し、また被護民が解族され第三次革命によつて庶民が都市に入り、終に民主主義の勝利となつたことをのべ、最後にこの都市制度が、新しき信仰とローマの征服事業とによつて消滅したことをのべてゐる。

かくのごとく本書は宗教をもつて社會萬般の原動力となし、その影響を强調せるが故に、他の原動力、例へば經濟的方面のごときを看過せるうらみを感ずるけれども、しかし古代社會において宗教が絕大の勢力を有したのは事實である。近時偏狹なる物質的史觀が努力を振はんとしつゝあるに對し、あくまで人間の精神力の偉大を唱導せる本書は、まことの史觀構成に對して正しき指導をなすものと言ふべきである。從つて本書の出現は、必ずやわが思想界に一大反響のあることを信じて疑はない。譯文は流麗にして精緻、裝釘は典雅にして堅牢、內容外觀ともにこの名著の邦譯として、吾々は最大の讃辭をさゝぐるに躊躇しない。つゝしんで譯者に滿腔の敬意を表す。

（松本芳夫）

系圖綱要（太田亮著　磯部甲陽堂發行）

さきに日本古代氏族制度並に姓氏家系辭書を著はされた太田亮氏は又系圖綱要を著はされた。本書は其の序の中に記るさる如く『一方に於いて姓氏家系辭書の姉妹篇たると共に、他方に於ては國史研究者の坐右に供したいと云ふ目的から生れたのであるから中央政權に關係ある氏のみに限られて居る』のである。其の記す處は神代御系圖・天皇御系圖・皇族御系圖・諸氏系圖の四系圖で、最後に附錄として簡單なる國史年表を添へて居る。

我國は古來より家の系圖を尊ぶ美風ある爲め、種々雜多の系圖並に其れに類するものが多く傳はり、剩さへ僞作も亦至つて多くそれ故に、この系圖の研究仲々容易なるもので無いのであるが、又仲々興味ある研究である。本書は多年氏族制度並に諸殿系圖に就

いて研究の上編集せられたので、比較的間違も少い樣で、參考となるは記述する迄も無い。

次に本書紹介の序に自分の二三氣附いた諸點を記し、著者の參考に供したいと思ふ。本書は皇族御系圖の一部のみに限りて振り假名を附し、他には少しも附して無いのは如何なる譯か、若し全般に亘りてそれが附せられてあるならば、見る者に非常に便利であると思ふ。又佛門に入られたる諸親王を皆な法親王と記してあるが、これを嚴密に云へば、入道親王と法親王との區別があるから、其の區別をあらはしては如何なるものであらうか、普通に系圖・系譜には其の區別をして居る。又皇族御系圖に至りては思ひの外簡略に過ぎて居るが、もう少し詳記せられたいものである。一二七頁閑院宮孝仁親王の五子に讓仁法親王が記してあるが、同親王は伏見宮兵部卿貞敬親王の王子であつて、天保二年に孝仁親王の「實子」となられたのである。これ等の例は他にもあるが、其の註を附せられたい。當時には眞の子の外に實子・養子・猶子なるものがあり、其の區別もやかましいものであつたから、是等には夫々註を附せられたい。又一三二頁甲の宣仁親王光宮の條に高松宮を加へられたい。猶一一五頁有栖川宮の始祖好仁親王の王女明子女王に(實池田光政女)とあるは如何なる史料に據られたものであらふか。猶其の外氣附いた點もあるが略して置く。

(武田勝藏)

西洋宗教思想史　希臘の卷第一

(波多野精一著　岩波書店發行)

本書はソクラテース以前の希臘宗教思想の文獻文化史的研究であつて著名なローデやグロートの研究に據つた眞面目なる研究である。然し本書は其の內容から言つて宗教思想史といふよりも寧ろ希臘創始時代及び啓蒙時代の一般的思想史とも言ふべきものである。蓋し此の時代既に希臘神話の統一的意識が次第に自覺しつゝあつたが大體に於て未だ各文化意識が相對的統一を保つて居つたものと思ふから價値意識の下に當時の宗教的意識を分明する事は困難であらう。從つて自然本書の示す如く其の範圍も一律に論じ難くなるのは言ふまでもない。然し著者は哲學史研究家であるだけ此の廣範なる領域を涉獵しながら當時の宗教意識を鮮明にせられしは今本書を特に推賞する所以である。

本書は希臘最古の文獻ホメロスの叙事詩の神觀と靈魂觀とより說明を初め抒情詩の發生と其に伴ふ詩人の過渡的思想を說きミレトス學派の自然哲學に依つて開始されたる神話的世界觀と哲學的世界觀との對峙を述べ、エレア學派クセノフアネスの新宗教觀と其の傳承的神話に對する大膽なる批評と悲劇詩人達の傳承的信仰や思想に對する鋭き反抗と正義觀を述べ、最後に波斯戰勝後のアテネ文化の繁榮に伴ふ新文化運動と其に伴ふソフイストの事業の目的と特質とを明かにしてゐる。此の點に於て特に裨益する處